



TITLE:

きらめく動物たちの命と海:久保田
信の白浜だより(その16)

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. きらめく動物たちの命と海:久保田信の白浜だより(その16). うみひろ 2011, 90: 19-21

ISSUE DATE:

2011-12-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180238>

RIGHT:

© 海の生き物を守る会

6. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その16)】

有毒のイラモ

イラモと聞くと、何かの藻と思うだろう。しかし、この藻にうっかり触れでもすると、さされてしまう。激痛が走り、その後は腫れ上がりみずぶくれになる。運が悪いと入院だ。京都大学瀬戸臨海実験所職員の一人が、海での仕事中に軽く接触してしまっただけで国際的な皮膚学会誌に掲載されるほどの症例にまで至った例さえある。イラモが分布を広げている沖縄でも、専門家たちの研究でさえ、ひどい刺傷にあった入院例も聞く。刺傷はこの動物門のトレードマークである細胞内に含まれるミクロの毒針の独特の成分によるが、不思議なことに形態的にはありふれたタイプの刺胞なのである。

イラモの漂着

台風 14 号が白浜を襲った 2005 年 9 月 5 日には、海辺の海底にたまっていた砂を潮間帯に大量に運び上げ、瀬戸臨海実験所北浜一面からもゴミや石ころがほとんどないほど見事にきれいに持ち去った。両日の高波で、イラモの 2 群体が打ち上げられていた。これにさわっても刺されるので要注意だ。

京都大学瀬戸臨海実験所水族館で飼育展示

イラモがミズクラゲの仲間だと聞くと、誰しも驚くだろう。京都大学瀬戸臨海実験所水族館でも、周年、飼育展示されており、その生活史もよく分かっている。本種は刺胞動物門鉢虫綱の 1 種だが、生物界のルールで、どの仲間にも存在する変わり種の好例である。イラモを水族館でじっくりご覧になって頂きたい。小さな水槽の壁に凸面ガラスがはりつけられている。まるで顕微鏡でのぞいているように拡大され、イラモの不思議な構造がよく分かる (図)。ラッパの様に開いた口から胃に続く花のような部分が開いているのが見えるだろう。花の部分の周囲全体には、ある一定間隔をおいて短い触手がびっしり生えている。水槽の前に簡潔な解説ラベルがあるので実物とあわせて読んで頂きたい。

イラモは瀬戸臨海実験所初代所長の駒井 卓先生が、瀬戸の人たちに教えられて、世界でまだ知られていない動物として新種記載した歴史的な動物だ。日本特産で我が国の南日本にのみ分布する。瀬戸臨海実験所が発行する年報の表紙のロゴマークになっているくらいだ。

イラモの変わった生活史

イラモの海中で生きている姿は、ポリプというクローンづくりをもつばら行く若い時代にあたる。海底で付着生活を送り、最初 1 つだったヒドラのような個虫から出芽という無性生殖により、あちこちから芽を出してこのように大きくなったのである。成長とともにこの仲間では他には見られない硬いキチン質の鞘を分泌し、やわらかい個虫を保護する。しかも、クローンはみなつながったままではばらばらにならない鉢虫綱では変り種の群体なのである。

イラモの生活史で注目されるのは、子孫づくりのためのクラゲの命が、あまりにもはかない点である。クラゲの若い姿のエフィラと呼ばれる形態で、既に生殖が可能になっている。それ以上は大きくなり 1 mm 程度の大きさだ。雄はポリプから離れて泳がないまま

で精子を出す。イラモのような風変わりな特質から進化の謎が探れるかもしれない。



図. 京都大学瀬戸臨海実験所水族館で周年展示中の刺胞動物イラモ